



県外主管の東海学術大会 名古屋で初開催

公益社団法人日本柔道整復師会第49回東海学術大会静岡大会



11月16日(日)午前10時から午後3時55分まで、公益社団法人日本柔道整復師会第49回東海学術大会静岡大会が、「ウインクあいち」にて開催され、学術大会に538名(本会会

員214名)、日整セミナーに194名(本会会員125名)が参加した。会員の利便性を考慮し、愛知県以外が主管する本学会が今回初めて名古屋で開催された。



佐藤隆史会員



西村武蔵会員

A会場では10時35分より12時25分まで会員研究の10演題の発表が行われ、本会からは佐藤隆史会員(中村)の「肘内障の超音波画像観察-発生メカニズムに対する一考察-」と、西村武蔵会員(岡崎)の「足関節捻挫の競技復帰に対する機能評価と運動療法」の2題が報告された。

B会場では10時20分から学生によるポスター発表は行われ、米田柔整専門学校船戸嘉忠担当教員(中村)指導のもと3題の発表があった。

12時からは「柔道整復師と介護保険について」と題し、日整・保険部介護対策課の三谷 誉(一宮)と川口貴裕両課員による日整セミナー(介護関連講習会)が開催された。

午後1時5分より2時10分まで、A会場にて基調講演として「柔道整復師の将来を語る」柔整業界の真の改革とは? =交渉の舞台裏=と題し、日整工藤鉄男会長の講演が行われた。工藤会長は柔道整復師の心意気や理念、業界の問題と改善点などを力強く説き、社会貢献できる仕組みの構築を必ず実現すると約束し、業界改革への会員の理解と協力を求めた。

引き続き2時15分より3時45分まで、米田 實先生により特別講演「私の診察室から」最新画像が示す、聴いて、視て、触って、動かす、そして「考える」ことの重要性が行われ、臨床では考えることより「感じる」ことが大切であると強調され、日本独自の社会医学の視点からも柔整学の発展と力につながるはずと示唆された。

来年は記念すべき第50回の東海学術大会となる。その主管県である本会の森川会長が閉会の辞を述べ、静岡大会は盛会の中に終了した。



お祝いに駆け付けた森川会長と春日井柔道部長



近藤亜美選手 優勝祝賀会

近藤亜美選手 優勝祝賀会

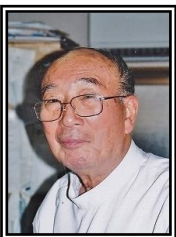
11月16日(日)午後5時より、ホテルグランコート名古屋にて、近藤亜美選手の世界柔道選手権大会48kg級優勝祝賀会が県柔道連盟や名古屋市柔道協会などが発起人となって盛会に行われた。森川会長も来賓として出席し祝辞を述べた。

近藤選手は六郷道場で柔道を始め、小学校3年から大石道場に所属して全国小学生学年別柔道大会5年生40kgで優勝を飾り、その後大成中学・大成高校から三井住友海上へと進む中で数々の国内外の大会で優勝を重ね、今回ロシア・チェリヤビンスク世界選手権柔道大会において初出場、初優勝を果たした。

愛整杯少年少女柔道大会にも小学3年より出場し、輝かしい成績を修めている。

故山田道生会員(大曾根) 瑞宝双光章を受章

6月9日に享年84歳で逝去された山田道生会員(大曾根)が、防衛省・自衛隊からの推挙を受け、瑞宝双光章を受章。10月17日、ご自宅にて授与式が行われた。昭和32年から陸上自衛隊法務官・一等陸佐を務め、昭和59年南法堂二代目として開業。同章は本会では、故第五代森川治会長以来4人目の受章となった。



Welcome!! 新入会員

氏名	生年月日	支部	出身校	段位	趣味
伊藤信吾	S57.10.2	大曾根	トライデント	—	ショッピング
加納裕士	S63.1.21	岡崎	明治国際医療	初段	ランニング



モンゴルからの研修員、3会員が受け入れ



歓迎と慰労の夕食会を開催(11/10)

下:右からバトムク・アルタンエルデネさん(29)、オユンバートル・ダリルチュルンさん(23)、ムンフバートル・ポロルチメグさん(21)
上:両副会長(両端)と各研修員の担当会員
右から森川伸治会長(大曾根)、加藤彰一会員(大曾根)、佐藤 泉会員(中村)

日整と国際協力機構(JICA)の共同事業として、接骨院でモンゴルの医療従事者の実地研修が行われている(下記記事参照)。

今回本会に3名の研修依頼があり、会員3名がそれぞれ研修員を受け入れた。

研修員は10月22日から約3週間、中区伏見のホテルに連泊して「通勤」しながら、柔道整復術のすばらしさを理解し院長に敬意を払って真摯に臨んだ。また研修期間がわずかである

ため非常に熱心に学び、その姿勢に他のスタッフも大いに刺激を受けたという。

接骨院での研修は11月15日で終わり、16日の東海学術大会静岡大会に出席した後、その日のうちに東京へ出発。次の研修先に向かった。

中日新聞(11月15日) 県内版

柔道整復術 モンゴルへ 医師3人名古屋で研修

遊牧生活での落馬や凍結した路面での転倒が多いモンゴルで日本の伝統的な柔道整復術を生かそうと、現地の医師3人が名古屋市内の接骨院で研修している。15日まで市内に滞在し、エックス線設備がなくても骨折や脱臼に対応する技を学ぶ。

国際協力機構(JICA) 同市北区大塚町の森川接骨院では、四度目の来日というバトムク・アルタンエルデネさん(29)とオユンバートル・ダリルチュルンさん(23)の2人が、10月22日から約3週間、中区伏見のホテルに連泊して「通勤」しながら、柔道整復術のすばらしさを理解し院長に敬意を払って真摯に臨んだ。また研修期間がわずかであるため非常に熱心に学び、その姿勢に他のスタッフも大いに刺激を受けたという。

接骨院での研修は11月15日で終わり、16日の東海学術大会静岡大会に出席した後、その日のうちに東京へ出発。次の研修先に向かった。

森川伸治さん(右)の手当てを見て学ぶバトムクさん(左)とオユンバートルさん(中央)は、10月22日から約3週間、中区伏見のホテルに連泊して「通勤」しながら、柔道整復術のすばらしさを理解し院長に敬意を払って真摯に臨んだ。また研修期間がわずかであるため非常に熱心に学び、その姿勢に他のスタッフも大いに刺激を受けたという。

接骨院での研修は11月15日で終わり、16日の東海学術大会静岡大会に出席した後、その日のうちに東京へ出発。次の研修先に向かった。

娘さんの林 正子会員は、「亡き父は、自衛官として柔道整復師として誇りを持ち一生懸命人生を全う致しました。このたびの受章は支えて頂いた多くの皆様のお蔭と感謝しております。私は柔道整復師としての祖父と父の遺志を継ぎ、南法堂接骨院三代目として、微力ではございますが業務に邁進していく所存であります。

今後とも、より一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い致します」と語った。(支部広報 横井達典)